

# 大安寺僧戒明が請来した唐代の宝誌像

西本昌弘

はじめに

七世紀から九世紀にかけて、日本の遣唐使はさまざまな中国文物を日本にもたらし、政治・法制・文化の近代化を進めてきた。その多くは長安・洛陽など都やその周辺の文物であったが、なかには遣唐使が入港した揚州や明州周辺の文化も日本に請来されて、大きな影響を及ぼした。

本稿では、大安寺僧の戒明が金陵（現在の南京市）から持ち帰った宝誌（保誌・志公・誌公）の真身像に注目し、戒明の入唐年次をめぐる議論を追いながら、また中国における宝誌伝の変遷を跡づけながら、その具体相について検討してみたい。

## 一 戒明の渡唐時期

鑑真とともに来日した唐僧思託が著した『延暦僧録』第五、戒明伝には、大安寺僧戒明の事跡が伝えられている。適宜段落に分

け、①⑤に区分して示すと、次のようになる。

- ①又云、釈戒明者、讚岐国人也。俗姓凡直氏。居大安寺、弱冠出家。依大安寺慶俊法師為師主、学華嚴經。便窮奥旨、兼採異聞。遠近緇流、蒙其日月。
- ②又得見傳大士影。傳大士者、是東陽人也。当梁武帝時、都金陵。東陽去金陵、道逾千里。帝克取旨施食、使至東陽見大士。……即是慈氏尊之分身也。戒明得見影拜礼。③復至城南半亭山、得見瑯琊王家大墓碑碣。石人石柱・麒麟・師子行列、侍衛道路兩廂。④復礼拜志公宅、兼請得志公十一面觀世音菩薩真身。還聖朝、於大安寺南塔院中堂、素影供養。
- ⑤在後宝龜十年、城中諸僧都集大安寺、連署欲奏廢大仏頂經云、是偽經。令戒明連署、取大仏頂、焚燒上。戒明不取。……唐大歷十三年、広平皇帝親請僧講大仏頂經。諸大徳自連署、戒明不連署。……

これによると、①戒明は讃岐国の人で、俗姓は凡直氏であった。大安寺に居住し、弱冠（二〇歳）で出家し、大安寺の慶俊を師主として華嚴経を学び、その奥旨を窮めるとともに、異説も採集した。遠方近在の僧侶はその賢説を受けたという。

戒明は、②傳大士の影を見学して、拜礼を捧げ、③城南半亭山にある瑯琊王家の大墓碑碣を見学して、墓道に整然と配列された石人・石柱などに驚き、④志公宅を礼拝して、志公十一面觀世音菩薩真身を請得し、日本に帰国後、大安寺の南塔院中堂において素影供養したという。②の傳大士の影、③の瑯琊王家の大墓碑碣、④の志公宅は、いずれも金城（現在の南京市）に所在する名所旧跡であったため、戒明は唐に渡った経歴をもつことがわかる。

⑤戒明帰国後の宝龜十年（七七九）、平城京内の諸僧が大安寺に集まり、大仏頂経を偽経として廃することを奏上せんとして、戒明に連署を求め、焼却させようとしたが、戒明は、唐の大歴（曆十三年（七七八）に広平皇帝（代宗）がみずから僧を招いて大仏頂経を講じているとして、連署を拒否した。

戒明が入唐した時期については、天平勝宝四年（七五二）<sup>1</sup>、宝龜元年（七七〇）<sup>2</sup>、宝龜三年説<sup>3</sup>、同八年説の四説が唱えられている。天平勝宝四年説は「遣唐学生・学問僧一覧表」の渡海年代欄に「天平勝宝四？」と書かれたもので、その根拠は明らかでなく、疑問符付きの仮説というべきものである。

宝龜元年説は、「大安寺の戒明が宝龜元年（七七〇）、宝誌和尚

の居を訪れて礼拝」と述べているが、『延暦僧録』には来訪年次は書かれていないので、誤解に基づく見解といえる。

宝龜三年説の根拠は、唐明空『勝鬘經疏義私鈔』卷一に、今上宮王疏所<sup>1</sup>積、即是後訳経、有二十一紙。其疏唐大曆七年、日本国僧使誠明・得清等八人、兼法華疏四卷、将<sup>2</sup>来揚州。與<sup>3</sup>龍興寺大律闍黎靈祐<sup>1</sup>。

とあることで、唐の大曆七年（七七二）、宝龜三に日本国僧使の誠明と得清が聖徳太子の『法華經義疏』と『勝鬘經義疏』を揚州龍興寺の靈祐に献呈したという。ここにみえる誠明は戒明と同一人物とみてよいだろう。また、田珍『大毗盧遮那成道経義釈目錄縁起』に、謂西大寺得清大徳、<sup>或書</sup>徳字。請来本一十四卷、<sup>大曆七年到唐、未委帰年也。</sup>とあることも、得清（徳清）の入唐年次が大曆七年であったことを示しているという。

そして、宝龜二年に来日した渤海使の壹万福らが、翌宝龜三年二月に帰途についているので、誠明（戒明）・得清（徳清）らは渤海使の帰船に同乗して、渤海經由であるいは直接唐に入ったとみるのが宝龜三年説である。

一方、宝龜八年説の根拠は、宝龜八年六月に遣唐使が唐に向けて出航し、翌九年十月〜十二月に帰国していることである。松本信道氏は、『勝鬘經疏義私鈔』が誠明・得清ら八人の身分を「日本国僧使」と表記していることから、彼らは公式な遣唐使に随行した「僧使」であったと考える方が穏当で、「大曆七年」は「大曆十

二年」の誤写であると説いている。

戒明の入唐年次を考える際に、大きな手がかりとなるのは、『日本霊異記』巻下、第一九縁にみえる次の説話である。すなわち、大安寺僧の戒明大徳が竺紫国府の大国師に任ぜられた宝亀七、八年ごろに、肥前国佐賀郡の大領佐賀君児公が安居会を設け、戒明法師に請い、八十華嚴を講ぜしめたという。この説話は宝亀年間のことを述べたもので、戒明のことを大安寺僧といい、彼が八十華嚴を講じたことと記すことから、入唐僧の戒明その人のことを述べたものとみて問題ない。<sup>⑤</sup>

宝亀の遣唐使は、宝亀六年六月に大使佐伯今毛人、副使大伴益立らが任命され、翌宝亀七年四月に節刀を賜り、八月六日までは肥前国松浦郡合蚕田浦に到ったが、順風が吹かず秋節に入ったため、来年の夏月に渡海せんと奏上した。朝廷はこれを認めた上で、その使節と水手は「彼にありて期を待ち、途を進むべし」と命じた。十一月に大使今毛人は帰京して節刀を返上したが、副使らは大宰府に留まった。年末には副使が大伴益立から小野石根・大神末足に交替した。宝亀八年四月、大使佐伯今毛人は辞見したが、病が癒えないため残留し、副使小野石根が節を持して進発することとなり、六月に遣唐使船は順風を得て海に入った。

以上のような宝亀遣唐使の出発時の経緯をみると、宝亀七年の秋以降、宝亀八年の夏頃まで、使節の構成員の多くは大宰府周辺で待機し、再出発のときを待ったことがわかる。戒明はこの待機

時に大宰府周辺において活動したとみるのが自然であろう。すなわち、戒明は宝亀の遣唐使の一員であったが、宝亀七年の渡海断念後に、筑紫国府の大国師に任命されて九州に留まり、翌年の再渡航前の四月に安居会の講師となったのち、六月に唐へ向かったと考えられるのである。松本信道氏が『霊異記』の宝亀七・八年という年代は、まさしく戒明が入唐するまでの時期と符合すると指摘するように<sup>⑥</sup>、宝亀遣唐使の出航の日程からみても、『日本霊異記』の説話に不審な点はなく、むしろ整合的な筋書きとなっている。

戒明の入唐年次を宝亀三年とみる東野治之氏は、『日本霊異記』の性格からいって、戒明が宝亀七、八年頃に筑紫国府の大国師に任ぜられたとする話は史実とみなしがたいとするが、上述の理由により、この意見には従えない。『日本霊異記』は延暦六年（七八七）に原撰本が成立し、その後、弘仁末年に増補された書物なので、<sup>⑧</sup>原撰本の成立からわずか一〇年ほど前のことを伝える記事を過度に疑うのは適当ではあるまい。『日本霊異記』にみえる戒明の事跡のうち、宝亀七、八年に筑紫に滞在していたということは事実とみてよいだろう。<sup>⑨</sup>

以上から、戒明・得清（徳清）らは宝亀八年（七七七、大暦十二年）出航の遣唐使の一行として渡海し、揚州に着岸ののち、金陵に赴き、仏教関係の名所旧跡を巡ったものと考えられる。

## 二 宝誌の真身像について

戒明は金陵において傅大士の影、城南半亭山にある瑯琊王家の大墓碑碣などを見学し、志公宅を礼拝して志公十一面觀世音菩薩真身を請得して、これを日本に持ち帰ったが、これらについて、それぞれ簡単に説明を加えておきたい。

金陵は現在の中国江蘇省南京市にあたる。南朝の歴代王朝がここに都を置き、建康や金陵と称された。唐代には江寧県・上元県に属することになる。

傅大士（四九七～五六九年）の名は傅翁、東陽大士・善慧大士とも称される。梁の武帝に書を送って「敬んで国王救世菩薩に白す」といい、みずからを双林樹下当来解脱善恵大士と号した。武帝は傅大士を建業に招いて、鍾山下の定林寺に住まわせた。武帝はのちに華林園重雲殿において般若經の講筵を開き、玉輦をもって傅大士を迎え昇殿させたという（『東陽双林寺傅大士碑』<sup>10</sup>、『統高僧伝』巻二五）。後述する宝誌（志公）と並び、多くの神異を残した人物として著名である<sup>11</sup>。

瑯琊王家の大墓碑碣は、金陵にあった瑯琊王氏の墓域に関わるものである。瑯琊王氏は山東省琅邪郡臨沂県を本貫とする一族で、西晋が滅亡すると、その混乱を避けるために南下し、東晋の成立後はその都建康（金陵）に移住し、その後、東晋の名族として政治・文化の発展に大きな役割を果たした。書聖の王羲之もそ

の一族である<sup>12</sup>。

南京市北郊の象山（入台山）には瑯琊王氏一族の墓群が存在しており、一九六〇年代から二〇〇〇年代にかけての発掘調査で、王彬の子王興之夫妻（一号墓）、王彬の長女王丹虎（三号墓）、王興之の長子王閔之（五号墓）、王彬の継室夫人夏金虎（六号墓）、夏金虎の子王企之（八号墓）、王彬の孫王建之夫妻（九号墓）、王康之夫妻（十一号墓）などの墓と墓誌が発見された<sup>13</sup>。

戒明が参拝したのは、象山にある瑯琊王氏一族の墓群のどこかであったのであろう<sup>14</sup>。『延暦僧録』を著した思託は瑯琊王家の後裔と称しているので（『延暦僧録』第一、思託伝）、王勇氏は、戒明と思託は親しい関係にあり、戒明は思託に依頼されて、一族の祖墓を参拝したのではないかと推測している<sup>15</sup>。

志公（四一八～五一四）は六朝期に神異で知られた僧で、正しくは宝誌・保誌という。最古の信頼できる伝記は、同時代の陸倕の「誌法師墓誌銘」（『芸文類聚』巻七七、寺碑）と、ほぼ同時代の慧皎が著した『高僧伝』巻一〇に所収の「梁京師釈保誌伝」である。後者によると、保誌の本姓は朱、金城の人。建康の道林寺で出家し、僧檢に師事し、禅業を修めた。劉宋の泰始年間（四六五～四七二）に至って、やや異常の行業があり、居に定所なく、飲食に時なき有様であった。長髪数寸、跣足で街巷を行き、常に剪刀・鏡や一両匹の帛を錫杖の頭にかけて持ち歩いていた。斉の高帝の建元年中（四七九～四八三）には神異の迹があつて、朝野・

上下の尊信を得たが、武帝によって一時、衆を惑わすものとして、首都の獄中に禁足を命じられた。梁の武帝が即位すると、「自今行道・來往、随意出入、勿得復禁」との詔が出されて、宝誌の行動に制限を加えないことが定められた。

武帝がかつて「煩惑いまだ除かれず、何によってこの惑を治すべきや」と問うたとき、「十二識」と答えた。これは「十二因縁」を知ることが惑を治す薬であるとの意である。また、「何時静心修習を得るや」との武帝に問いに、「安樂禁」と答えている。これは終生静心修習は廢すべきでないとの意である。<sup>16)</sup>

陳御（征）虜なる者がいて、家族をあげて熱心な信者であったが、保誌はかつて彼のために真形を現した。その光相は菩薩像のようであったという。

このようにして、宝誌はその神異の行業を知られること四〇余年、士女の恭事する者が多かった。天監十三年（五一四）冬、衆人に「菩薩まさに去かんとす」と言ったのち、旬日を経ずに疾なくして亡くなった。厚く殯葬を加え、鍾山独龍阜に葬り、墓所に開善精舎を建てた。武帝は陸倕に勅して塚内に墓誌銘を作り、玉筠に命じて碑文を寺門に勅まかせさせた。その遺像は処々に存している。以上に掲げた保誌（宝誌）の当初の伝記では、宝誌が菩薩像の如き真形を現じたとか、「菩薩まさに去るべし」と告げて没したというように、菩薩との関わりを暗示する記述が存在したが、それほど具体的なものではなかった。ところが後世になると、宝誌が

菩薩の化身であることが次第に強調されていくことになる。

その第一の変化が確認できるのは八世紀後半である。『延暦僧録』所引の戒明伝に、戒明が志公宅で志公十一面觀世音菩薩真身を請得して帰国したとあるように、唐においてはすでに八世紀後半に宝誌は十一面觀世音菩薩の化身であることが喧伝されていた。中国の文献では、九世紀初頭頃成立の『北山録』<sup>17)</sup>卷三に「有以觀音為誌」（『大正藏』五二卷、五九二頁）とみえるのが、宝誌を觀音菩薩と表現する初例であるという。<sup>18)</sup>

その後、開成五年（八四〇）四月六日、円仁は五台山巡礼の途中、長白山醴泉寺を訪ねて、瑠璃殿内に安置される「誌公和上影」を礼拝した際に、「誌公和上是十一面菩薩之化身。其本緣鐫着碑上」と書いている（『入唐求法巡礼行記』同日条）。「其の本緣は碑上に鐫り着せり」とあるように、醴泉寺には宝誌伝を記した碑文が存在した。この碑文の文字は『全唐文』卷九九三、『金石萃編』卷七〇、『八瓊室金石補正』卷五〇などに「（大）唐齊州章邱県常白山醴泉寺誌公（之）碑」として伝えられており、開元三年（七一五）十月十五日に長安薦福寺の元傘が撰したものであるが、碑文には摩滅が激しく、判読できない文字が多い。

小野勝年氏は、この碑文中に宝誌が十一面菩薩の化身であることも書かれていたと解したが、<sup>19)</sup>碑文中には「□身之菩薩」「真身永永」などの文字は認められるが、「觀音」を示す字句は確認することができない。開元三年のこの碑文の時期には、宝誌十一面觀音

応化説は未成立であったとみる方がよいであろう。<sup>20)</sup> 牧田諦亮氏や徳護氏のいうように、宝誌を十一面観音菩薩の化身とみなす言説は、戒明が在唐した代宗の大暦年間（七六六―七七九）には成立していたと考えられる。<sup>21)</sup> たんなる菩薩から十一面観音菩薩という特定の菩薩の化身へと見方が変わったのである。

次に変化が確認できるのは十世紀後半である。宋初の王道真が汴京の相国寺の「殿西」「西門之南」に「誌公變<sup>22)</sup>十二面観音<sup>23)</sup>像」を描いたことが、『図画見聞誌』巻二や巻六にみえる。『聖朝名画評』巻一では、王道真が相国寺の「大殿西徧門南面東壁」に「宝誌化<sup>24)</sup>十二面観音<sup>25)</sup>相」を描いたとある。こうした相国寺の宝誌画像について、松本栄一氏は、太宗の至道二年（九九六）に行われた相国寺の殿門重修の際の製作であろうと論じている。<sup>26)</sup>

この宝誌が十二面観音に変ずる像（化する相）というものは、宝誌が十一面菩薩の化身であるという表現とはやや異なるものである。小野勝年氏がいうように、この変ずる像（化する相）というのは、宝誌が顔面を裂いて十二面観音の相好を現した伝説をさすものとみるべきであろう。<sup>27)</sup>

徳護氏によると、敦煌遺書中の写本S〇一六二四号に、張僧繇が宝誌の像を写した際に宝誌が十二面観音の姿を現したとあり、ペリオ収集の敦煌画「南無十二面観音菩薩」（MG二五四八六）に顕徳六年（九五九）の年紀があることから、五代末には宝誌が十二面観に変化する説話が存在したという。<sup>28)</sup>

この伝説をさらに詳しく伝えているのが、北宋の覚範恵洪（一〇七一―一一二八）が撰した『石門文字禪』所収の宝誌伝であり、同書には、

舍<sup>29)</sup>於陳征虜之家<sup>30)</sup>。輒自齎<sup>31)</sup>其面<sup>32)</sup>、分<sup>33)</sup>披之<sup>34)</sup>、出<sup>35)</sup>十二首観音<sup>36)</sup>。

と記されている。<sup>37)</sup> また、咸淳五年（一二六九）に志磐が撰した『仏祖統紀』の南齊高帝、建元四年（四八二）条には、

詔迎<sup>38)</sup>皖山誌公<sup>39)</sup>入京、公髻<sup>40)</sup>其面<sup>41)</sup>為<sup>42)</sup>十二面観音<sup>43)</sup>、帝以<sup>44)</sup>其惑<sup>45)</sup>衆惡<sup>46)</sup>之<sup>47)</sup>。

とあり、同書の梁武帝、天監二年（五〇三）条にも、

嘗詔<sup>48)</sup>張僧繇<sup>49)</sup>写<sup>50)</sup>誌真<sup>51)</sup>。誌以<sup>52)</sup>指髻<sup>53)</sup>破面門<sup>54)</sup>、出<sup>55)</sup>十二面観音相<sup>56)</sup>。或慈或威。僧繇竟不<sup>57)</sup>能<sup>58)</sup>写<sup>59)</sup>。

とある。梁の武帝が張僧繇に命じて、宝誌が指で顔面を引き破り、十二面観音の相を出したところを写させたが、僧繇はついに写しえなかつたという。ここに至って、宝誌は顔面を引き破って十二面観音の真相を出すという表現が姿をみせることになる。

以上、宝誌と菩薩との関わり方の変遷をみてきた。六世紀前半には宝誌の真形は菩薩のようであったという漠然としたものがあったが、八世紀後半には宝誌は十一面観音菩薩の化身であるという言説に変化し、さらに一〇世紀後半には顔面を破って十二面観音の真形を出すという言説に変化したことになる。

そこで、中国に現存する宝誌像について概観しておきたい、中

国に遺存する宝誌の画像や石像のうち、唐代に遡るものを列举すると、以下のようになる。<sup>26)</sup>

(1) 四川省广元市観音崖摩崖造像第一〇五号龕 宝誌像（七五一～八三三年の間）

向かって左に宝誌像、右に菩薩像を刻む。宝誌像は帽子をかぶり、法衣と袈裟をつけ、錫杖を右肩にかつき、錫杖には上から剪刀・鏡・尺が懸けられている。現在確認されている最古の宝誌像として注目される。

(2) 四川省夾江千仏崖摩崖造像第九一号龕 三尊像（九世紀後半）

祖師像を三尊形式に配した龕で、中尊は僧伽、左脇侍に宝誌、右脇侍に萬迴を配す。宝誌は帽子をかぶり、左手にもつ錫杖の先には剪刀・尺・鏡・箒を懸ける。

(3) 四川省綿陽市北山院摩崖造像第一一号龕（八八一年ごろ）

(2)と同じ僧伽・宝誌・萬迴の三尊形式の像である。

(4) 敦煌莫高窟第三九五窟甬道南壁（晚唐頃）

単独の画像である。三布帽をかぶり、左肩に錫杖をかつき、杖頭には鏡・曲尺・箒を懸ける

(1)は宝誌像と菩薩像を左右に並べて刻んだもの、(2)と(3)は僧伽・宝誌・萬迴を刻んだ三尊像、(4)は宝誌の単独壁画であるが、菩薩像を描いたものは(1)のみである。三尊形式の龕といえは、円仁が請求した「檀龕僧伽誌公萬迴三尊像 一合」（『入唐新求聖教目錄』）が想起される。この三者はいずれも観音菩薩の化身として信

仰されていた。この檀龕は会昌五年（八四五）五月に円仁が長安を去るにあたって、新羅人李元佐より贈られたものである。<sup>27)</sup>

注目すべきは、(1)が現在確認しうる最古の宝誌像であり、八世紀から九世紀にかけての頃の作品であることである。(1)の宝誌像の右に添えられた菩薩像は観音と推定され、宝誌が観音菩薩の化身であることを表現したものとみられる。<sup>28)</sup>年代的にもっとも近いことから、戒明が唐から持ち帰った宝誌像としては、このような宝誌と菩薩を並立して表現したものを想定すべきではなからうか。

### 三 大安寺の宝誌像

大安寺僧の戒明は唐から宝誌像を請求し、大安寺南塔院中堂で素影供養した。大安寺南塔院とは、大安寺の金堂・講堂などが建立された堂院の南側に配置された伽藍地で、ここに東西両塔が建立された。大安寺の堂院は天平十五年（七四三）に完成したが、南塔院の整備はその後に進められ、天平神護三年頃には東塔が竣工し、宝龜年間には西塔の造営が進められた。<sup>29)</sup>両塔の建設中にも南塔院中には何らかの堂舎が建てられており、以下のように、ここで法会や講經が行われたようである。

『日本書紀』中卷、二四縁に、聖武朝以降のある時期、大安寺の南塔院で仁耀が金剛般若經を読んだとあり、『唐大和上東征伝』には、天平宝字三年（七五九）以降のある時期、僧の惠新が大安塔院で『四分律疏』などを講じたとある。また弘仁六年（八一五）

八月には、和氣氏の請を受けた最澄が大安寺塔中院に赴いて、法華講筵に参列している（『叡山大師伝』）。戒明が帰国した宝亀九年（七七八）頃には、大安寺の南塔院内に宝誌の素影を供養する中堂が存在していたのである。中堂とは東塔・西塔を擁する塔院（南塔院）内の一堂舎と考えられる。

それでは、戒明が請来した宝誌像はどのようなものであったと考えられるのか。確認できる箇所では、古代・中世の大安寺には、宝誌像が二点伝えられていた。

まず第一は宝誌の木像である。大江親通が嘉祥元年（一一〇六）に南都七佛寺を巡礼した際の手記と推定される『七佛寺日記』の「大安寺条」には、

仏壇異巴角、宝師〔誌〕和尚面ヲ曳破現給像アリ。木像ナリ。とあり、大安寺の仏壇の南西角に宝誌が顔を曳き破る木像が安置されていたという。

また、大江親通が三四年後の保延六年（一一四〇）に再び南都七佛寺を巡礼した時の記録である『七佛寺巡礼私記』の「大安寺条」には、

宝誌和尚木像影、高三尺。斯像在「仏殿辰巴角」。以「両手」搦「面皮」、其中現「仏身」者也。

とあり、大安寺金堂の仏壇南西角に、両手で顔面の皮を開き、その中に仏身を現した三尺の木像が安置されていたという。この不可思議な仏像は大安寺には現存しないが、京都市下京区の西往寺が所蔵する宝誌像がこれと同類のものと考えられる。この西往寺

像は藤原時代の制作とされている。<sup>30)</sup>

大安寺に存在した第二の宝誌像は、塔内に描かれていた壁画である。醍醐寺本『諸寺縁起集』放光菩薩記には、

大安寺塔下北面、西戸脇連子壁板、有「梁武帝与「志公和尚」面談影」、其銘曰、

梁武帝問「志公」、朕求「成仏」、当「修行」法。志公対曰、解「无常」、学「大理」、敬「三宝」、存「終始」、莫「称」我、莫「喚」你、好事行、恶事止、自取「非」、与「他是」、穢底是云々。

とあり、大安寺塔下の北面西戸脇の連子壁板に梁の武帝と志公が面談する影があり、それには志公が武帝に成仏と修行の法を説く内容の銘文が記されていたという。

この第二の宝誌像に付された銘文の原型と思われる文章が、敦煌鳴沙山出土文書（スタイン本S三一七七）中の「梁武問誌公」と仮題された断簡のなかに確認されている。<sup>31)</sup>『景德伝燈録』卷二九に、「誌公和尚大乘讚」「誌公和尚十二時頌」などがあるが、「梁武問誌公」の内容はこれらとは異なるものである。

毛利久氏や牧田諦亮氏は、大安寺金堂安置の第一の木像こそが戒明が持ち帰った宝誌像であり、両手で面皮を裂き、その中から仏身を現する奇怪な宝誌像は、八世紀後半に遡ると論じている。<sup>32)</sup>

この見解は小野勝年・服部匡延・王勇・北進一などの諸氏にも継承されており、通説となっていたが、松本信道氏は、大安寺の諸院がしばしば倒壊・焼失していることから、戒明請来の宝誌像は

平安後期までに焼失した可能性が高いので、両者は別像であると論じている。<sup>34)</sup>

松本説をうけて神野祐太氏も戒明請来像と大安寺金堂像とは異なるものであるとし、戒明が請来した「志公十一面観世音菩薩真身」像は、開善寺の石柱記に記される宝誌像を模した彫像であり、顔面が裂けているものではなかったと考えた。

戒明は金城の「志公宅」で志公十一面観世音菩薩真身を請得したのであるが、神野氏によると、「宅」には墓所の意味があるので、戒明が見学した「志公宅」とは、宝誌の墓所たる開善精舎（開善寺）をさすという。そして、李頌行「上元県開善寺修誌公和尚堂石柱記」（『全唐文』卷七八八）によると、開善寺には誌公和尚堂があり、堂内に安置されていた彫像の宝誌像は、梁の武帝が宝誌の存命中に刻ませたため、「相好無遺、儼然若對」ものであったという。神野氏はこの石柱記に記される宝誌の彫像に注目し、戒明が日本にもたらした宝誌像は、開善寺に安置されていた宝誌像を模した彫像であったと結論づけたのである。<sup>35)</sup>

戒明請来像が顔面を引き破る形状の宝誌像ではなかったという点については、私も松本・神野両氏の見解を支持したい。ただし、戒明が請来した「志公十一面観世音菩薩真身」像は彫像ではなく、画像であるともた方がよいのではないか。『本朝高僧伝』巻四の戒明伝には「至誌公宅」、請得誌公真身観音大士画影「而還」とあり、戒明は誌公真身観音大士の画影を請得して帰国したと解釈し

ている。木宮泰彦氏も「志公の宅に於て十一面観音の画像を得て帰り」と述べ、松浦貞俊氏も「観音の画像を請ひ得て帰り」と記す。<sup>37)</sup>多くの辞典類でも戒明は観音画像を請来したと書かれており、画像説の方が一般には定着しているといえる。

そこで注目すべきは、貞観十三年（六三九）の序をもつ裴孝源『貞観公私画史』に、

開善寺、（張僧繇画、在江寧）（内は分注）

とあり、開善寺に梁の張僧繇が描いた壁画があったことを記していることである。張僧繇は南北朝時代の画家で、梁の武帝・蕭紀父子に半世紀にわたって仕え、勅命を受けて多数の寺院壁画を制作し、簡素な筆線による的確な形態把握と肉体表現を特徴とした。<sup>38)</sup>前述したように『仏祖統紀』に、梁の武帝が張僧繇に命じて宝誌の相を写させたが、ついに写しえなかったと伝えられているのは、開善寺に張僧繇が描いた宝誌の壁画が存在したからであり、これを脚色した伝承が作り出されたのであろう。

米芾『画史』の唐画条に、范瓊が「梁武帝写誌公図一幅」を描いたとあるのも、梁の武帝が張僧繇に宝誌の真像を写させた図があったことを示唆している。<sup>40)</sup>したがって、開善寺には石柱記が記す宝誌の彫像以外に、張僧繇の手になる宝誌の壁画も存在しており、戒明請来像はこの宝誌の壁画を写したものであった可能性が高いと思われるのである。

戒明は帰国後、大安寺南塔院中堂において請来した宝誌像を「素

影供養」したというが、この「素影供養」という表現も、この像が画像であった可能性を高めるものである。円仁は『入唐求法巡礼行記』開成四年正月三十日条に、揚州の龍興寺に南岳大師の顔影があり、東塔院には鑑真（過海和尚）の素影が安置されると記すが、小野勝年氏は、顔が顔料の義で彩色した影像、素影は白描画の影像の意味に解すべきではあるまいか、と述べている<sup>41</sup>。素影が白描画をさすすると、戒明が持ち帰ったのは宝誌を描いた画像であり、それは開善寺にあった張僧繇の手になる宝誌の壁画を写したものであったと考えられるのである。

また、その宝誌像を「素影供養」したというのみで、これを大安寺の南塔院中堂に描いたとか写したと書いていない点も注意される。肥田路美氏は張僧繇の画業に関連して、壁画は必ずしも現地で白土の壁に画かれたとは限らず、板画や、絹・紙に画いたものを壁に貼る方法もあると指摘している<sup>42</sup>。戒明が請来した宝誌像も絹か紙に書かれた画像で、これを大安寺南塔院中堂の壁に貼付するか立てかけるなどして供養したものと思われる。

この宝誌を描いた壁画は、大安寺金堂にあったような顔面を引き破る姿の宝誌像ではなかったであろう。前述したように、こうした形状の宝誌像は中国では五代末以降、日本では平安中期以降に確認できるからである。中国に残る現存最古の宝誌像からみて、戒明が請来した宝誌像は宝誌と十一面観音菩薩を左右に並置して描いた画像であったと推測される。

開善寺は宝誌の墓所があった寺で、日本の戒明はここを訪れて「志公十一面観世音菩薩真身」を請得した。開善寺には梁の武帝が張僧繇に宝誌真身を描かせた壁画があり、戒明はこの壁画を模写して日本に持ち帰ったものと思われるのである。

#### おわりに

宝龜の遣唐使の一員として入唐した戒明が、金陵において傳大士の影を礼拝し、宝誌の墓所（開善寺）を礼拝して、宝誌の画像を書写し、日本に帰国したのち、大安寺の南塔院中堂で供養したことは、日中文化交流の一齣として注目される出来事である。

八世紀後半の日本では、唐僧鑑真が来日し、聖武上皇以下に戒律を授けたことを契機にして、王族・貴族層の仏教信仰がさらに高まりをみせ、光仁天皇のもと大安寺がその寺格を一躍高め、親王禅師の早良親王が止住して、伽藍修造の大事業が展開中であった。

戒明以降においても、円仁が五台山醴泉寺で宝誌像を礼拝するとともに、宝誌を含めた三聖壇龕を請来しており、円珍が「梁朝志公歌」を請来するなど、入唐天台僧は宝誌に深い関心を寄せていた。また、最澄が『内證仏法相承血脉譜』中に傳大士を引用し、最澄や円仁・円珍が傳大士に関する詩を請来したことも見逃せない<sup>43</sup>。傳大士はのちに天台・禅の両宗で帰依されるが、これは傳大士の菩薩戒仏教が二方向に継承発展した結果であるという<sup>44</sup>。

その意味では、戒明が金城で傳大士と宝誌の遺跡に触れ、宝誌

の画像を請来したことは、日本における初期天台の導入という仏教史上の問題と関わる可能性がある。のち弘仁六年に最澄が大安寺南塔院で開かれた法華講会に招かれたことも、そうした文脈で考え直してみる必要があるかもしれない。宝誌や傳大士と日本仏教との関わりについては、さらなる考究が求められるであろう。

注

- (1) 木宮泰彦『日華文化交流史』（富山房、一九五五年）一四六頁。
- (2) 小峯和明『野馬台詩』の謎（岩波書店、二〇〇三年）一六頁。
- (3) 安藤更生「支那典籍に現れたる鑒真大和上とその門流」（『唐招提寺論叢』桑名文星堂、一九四四年）一四頁、東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」（『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年）一三二頁、王勇『聖徳太子時空超越』（大修館書店、一九九四年）二七五～二七六頁。
- (4) 森田龍僊『釈摩訶衍論之研究』（藤井佐兵衛、一九三五年）二三頁、小野玄妙「奈良朝末期の入唐僧大安寺戒明阿闍梨」（『小野玄妙仏教芸術著作集』一〇、開明書院、一九七七年）九〇一頁、藏中進「唐大和上東征伝の研究」（桜楓社、一九七六年）一三五頁・一五二頁、松本信道「徳清の入唐について」（『駒沢大学文学部研究紀要』六八、二〇〇一年）三～六頁。
- (5) 松本信道『靈異記』下巻十九縁の再検討」（『駒沢大学文学部研究紀要』五三、一九九五年）一〇八頁。
- (6) 松本信道注（5）論文一一一頁。
- (7) 東野治之注（3）論文二三八～一三九頁。
- (8) 倉野憲司「日本靈異記攷」（『文学』二一一〇、一九三四年）、池田亀鑑「和歌・歌物語・日記・説話に関する論考」（『中古国文学論考』第三分冊、目黒書店、一九四七年）、八木毅「日本靈異記の撰述年時につ

大安寺僧戒明が請来した唐代の宝誌像

- (9) 水口幹記『日本靈異記』下巻第十九縁の構成と成立」（藤女子大学国文学雑誌）九一・九二、二〇一五年）も松本信道説に従い、宝亀七、八年に戒明が大宰府に滞在していたことを史実とみなしている。なお、堀池春峰「弘法大師と南都仏教」（『南都仏教史の研究』下、法蔵館、一九八二年）四二四～四二六頁は、戒明の入唐年次を天平勝宝四年か宝亀三年とみた上で、唐より請来した『釈摩訶衍論』が論争を起し、戒明の求法成果に非難が起ったことから、戒明は中央仏教界よりみずから進んで逃避したか、左遷されたのではないかと論じている。東大寺教学部編『シルクロード往來人物辞典』（同朋舎出版、一九八九年）の「戒明」項も同様である。しかし本文中で述べたように、戒明の筑紫滞在は入唐以前のことと考えられるため、こうした逃避・左遷説は成立しないであろう。
- (10) 『全上古三代秦漢三國六朝文』全陳文卷一一に所収。
- (11) 関口真大『達磨の研究』（岩波書店、一九六七年）三三三～三三四頁、松崎清浩「傳大士の思想」（『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』一五、一九八一年）八七～八八頁、松本信道『延暦僧録』戒明伝の史料的特質」（『駒沢史学』三七、一九八七年）三九頁。
- (12) 岡崎敬「図説中国の歴史」三、魏晉南北朝の世界（講談社、一九七七年）七五～八二頁。
- (13) 川合安「東晋琅邪王氏墓誌について」（『南朝貴族制研究』汲古書院、二〇一五年）。
- (14) 松本信道注（11）論文四二頁。
- (15) 王勇注（3）著書二八〇～二八一頁。
- (16) 牧田諦亮「宝誌和尚伝攷」（『中国仏教史研究』第二、大東出版社、一九八四年）六〇頁。
- (17) 椎名宏雄「北山録」について」（『印度学仏教学研究』一九一、一九七一年）九一九頁。
- (18) 徳護「北宋代における宝誌伝の受容」（『駒沢大学大学院仏教学研究

- 会年報」五一、二〇一八年）七七頁。
- (19) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第二卷（法蔵館、一九六四年）三五四頁。
- (20) 牧田諦亮注（16）論文七八〜七九頁。
- (21) 牧田諦亮注（16）論文七六〜七七頁、徳護注（18）論文七七頁。
- (22) 松本栄一『燉煌画の研究』図像篇（同朋舎出版、一九八五年）五二九頁。
- (23) 小野勝年注（19）著書三五四頁。
- (24) 徳護注（18）論文七七〜七八頁。
- (25) 徳護注（18）論文八九頁。
- (26) 以下の四例のうち、丁明夷「川北石窟札記」（『文物』一九九〇年第六期）と北進一 a 「四川省広元市観音崖石窟踏査記」（和光大学表現学部紀要一、二〇〇〇年）は(1)、北進一 b 「神異なる仮面の高僧——四川省石窟宝誌和尚像報告——」（象徴図像研究）一〇、一九九六年）は(2)(3)、肥田路美「四川省夾江千仏岩の僧伽・宝誌・萬廻三聖龕について」（早稲田大学大学院文学研究科紀要）五八、第三分冊、二〇一三年）は(2)〜(4)、神野祐太「大安寺戒明請来の宝誌和尚像について」（『仏教美術論集六 組織論——制作した人々』竹林舎、二〇一六年）は(1)〜(4)、松本栄一注（22）著書は(4)について、それぞれ論述しており、(4)の画像は、松本栄一『燉煌画の研究』附图（同朋舎出版、一九八五年）一四九に掲載されている。
- (27) 北進一注（26）a 論文二二五頁、神野祐太注（26）論文一六頁。
- (28) 北進一注（26）a 論文二二四頁。
- (29) 西本昌弘『早良親王』（吉川弘文館、二〇一九年）三八〜四九頁。
- (30) 毛利久『宝誌和尚像』（『日本仏像史研究』法蔵館、一九八〇年）三七二頁、北進一注（26）b 論文二七頁。
- (31) 矢吹慶輝『鳴沙余韻』（岩波書店、一九三〇年）七八頁、同『鳴沙余韻解説』（岩波書店、一九三三年）二〇九〜二一〇頁、服部匡延「古史料にみる大安寺七重塔壁画の諸問題」（『美術史研究』一〇、一九七二年）一一〜一二頁。
- (32) 毛利久注（30）論文三七一頁、牧田諦亮注（16）論文七六頁。
- (33) 小野勝年注（19）著書三五四頁、服部匡延注（31）論文一一頁、王勇注（3）著書二七二頁、北進一注（26）b 論文三〇頁。
- (34) 松本信道「宝誌像の日本伝来（一）」（『駒沢大学文学部研究紀要』六四、二〇〇六年）三八〜四〇頁。
- (35) 神野祐太注（26）論文一四〜一五頁、一八頁。
- (36) 木宮泰彦注（1）著書一四六頁。
- (37) 松浦貞俊『日本国現報善惡靈異記註釈』（大東文化大学東陽研究所、一九七三年）三九六〜三九七頁。
- (38) 『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九五四年増訂版）三九九頁、『日本仏教史辞典』（東京堂出版、一九七九年）六八頁、『国史大辞典』第三卷（吉川弘文館、一九八三年）一〇七頁、『日本古代氏族人名辞典』（吉川弘文館、一九九〇年）一八〇頁、『日本史広辞典』（山川出版社、一九九七年）四〇五頁、『総合仏教大辞典』（法蔵館、二〇〇五年）一七四〜一七五頁。
- (39) 肥田路美「張僧繇の画業と伝説」（吉村怜博士古稀記念会編『東洋美術史論叢』雄山閣出版、一九九九年）。
- (40) 松本栄一注（22）著書五三〇頁。
- (41) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一卷（法蔵館、一九六四年）三三二頁。
- (42) 肥田路美注（39）論文一九五頁。
- (43) 松崎清浩注（11）論文九〇頁、松本信道「宝誌像の日本伝来（二）」（『駒沢大学文学部研究紀要』六五、二〇〇七年）。
- (44) 中島志郎「傳大士と菩薩戒思想」（『印度学仏教学研究』六三〜一二、二〇一五年）一八二頁。

# The image of Hoshi that Kaimyo—a Buddhist priest of Daian-ji-Temple—brought to ancient Japan from Tang Dynasty China

NISHIMOTO Masahiro

Kaimyo, a Buddhist priest at Daianji-Temple, visited Kinryo's historic sites during the eighth-century Tang Dynasty. During this visit, he obtained an image representing the true figure of Hoshi, a legendary Buddhist priest, from Hoshi's home and brought it back to Japan. As for the year when Kaimyo visited Tang, the Houki first year (770) theory, Houki third year (772) theory, and Houki eighth year (777) theory are claimed. This is still described in "Nihon Ryouiki." Since this narrative is credible, it is important to keep in mind that Kaimyo was a member of the envoys to the Tang Dynasty who left Japan in Houki eight years.

Hoshi's home includes the Kaizenji-Temple and the graveyard of Hoshi. The temple hosts the statue and mural of Hoshi. There is a high possibility that the Hoshi image that Kaimyo brought back was a reproduction of a mural of Hoshi in Kaizenji.

キーワード：戒明 (Kaimyo)、大安寺 (Daianji Temple)、宝誌の画像 (Portrait of Hōshi)

